

人権ほつと28年10月号

ダーリンは七〇歳

大阪教育大学教授

堀 薫夫

漫画家の西原理恵子と整形外科医の高須克弥の熟年恋愛を描いた『ダーリンは七〇歳…高須帝国の逆襲』は、二〇一六年五月末に刊行されるも、発売後わずか五日で全部回収・絶版となった。一体背後に何があったのか？ 出版社の小学館側は高須氏にある記述の修正を求めたのだが、応じてもらえなかったとのこと。しかしそれはすでに出版OKとなつてからあとのこと。なぜ編集の段階できちんとチェックをしなかったのか、この点に対して高須氏は怒つたのだ。つまりこの本の回収問題の背後には、出版社側の杜撰な編集体制にあつたといえる。

問題となつた箇所に関しては簡単に想像がつく。高須院長のひいじいさんが江戸時代の身分差別を受けた層の者への態度や発言の部分であろう。しかしこの点は、現在の西原

氏への対応の原点にある挿話という意味で省略できない部分でもあるといえる。部落解放同盟の関係者は、こうした場合はその時代的な文脈を理解したうえで、注意書きなどから、差別を助長するものではないと付記すればよかつたのではと述べておられた。

人権問題で留意すべきは、単なる言葉や言い回しではなく、その発言の文脈と意図、そしてその時代的背景などを総合して判断すべきだという点であろう。私は本書は広い意味で「良書」だと思うし、安易な編集体制により、こうした本が絶版とされたことを遺憾に思っている。

本書は一見すると通俗的な本のようなのであるが、その結論部分では、人生の山下りを謳歌するため、いかに自身の伴走者へのトリセツをつくるかという、重要な課題を投げかけている。真逆の人生を歩んだのち、ともに伴侶を亡くした者同士がいかに寄り添つていくのかという大きな問題。